

<b>1 学校教育目標</b>
<p>本黌建学の精神である三綱領を根幹とし、徳育・体育・知育の三育併進、文武両道の気風を尊重し、一つ一つの教育活動を着実に実践し学校の活性化を目指す。生徒を育成するに当たっては</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 他者への思いやりを大切にし、社会に貢献する生徒の育成</li> <li>2 心身ともに逞しく豊かな人間性を備えた生徒の育成</li> <li>3 志を高く持ち、自ら求めて学ぶ生徒の育成</li> </ol> <p>を目指す。</p>

<b>2 本年度の重点目標</b>
<ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 社会に貢献できる生徒（グローバルリーダー）の育成</li> <li>(2) 生徒指導の充実</li> <li>(3) 心身の健康の保持増進及び安全教育の徹底</li> <li>(4) 学力の向上</li> <li>(5) 進路指導の強化</li> <li>(6) スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定校としての取組推進</li> </ol>

※下の自己評価総括表内の「評価」項目は、4点満点である。

<b>3 自己評価総括表</b>						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学 校 経 営	建学の精神の継承	教育活動の中での三綱領の理念の実践	三綱領の精神を理解し、自らその実践に励む生徒を育成する。	・学校全体で取り組み、様々な教育活動の場で折に触れ意識させる。	3.2	学校行事や諸活動においては三綱領の理念を大切にし、生徒はその精神を発揮した。
	SGH事業の精選・継承	グローバル人材の育成	これまでのSGH事業での取組を活かし教育活動の充実を目指す。	・SGH企画委員会が立案し、学校全体で取り組む。	3.0	成果発表会は概ね高評価をいただいた。継承を意識した取組にも挑んだ。学校全体の指導体制は継続して検討中である。
	学校の活性化	学校行事の工夫・改善	生徒に活躍の機会を与え魅力ある学校作りを目指す。同時に「働き方改革」を推進し生徒と向き合う時間の確保を図る。	・運営委員会を定期的に実施し検討・協議の機会を確保する。 ・PDCAサイクルを機能させ年度内に改善するよう努める。	3.1	各部自己評価のサイクルは定着したが各部等への提言に対する対応は工夫を要する。「働き方改革」についてはできることから着手した。今後も継続して取り組む。
	職員の資質向上	校内研修の充実	各学期複数回の校内研修を通じて職員の資質向上を図る。	・各部が立案し、当面の課題に対し学校全体で取り組む。	3.1	校内研修の時間確保が困難であるが予定した研修は実施できた。
	安全管理	施設・設備の保守・点検	危険箇所には迅速に対応する。	・定期的な安全点検に加え、報告連絡相談を確実にを行う。	3.1	修理等の要望に対しては迅速に対応した。職員個々の安全意識の高揚が求められる。

	言語活動の充実	グローバル社会をリードする人材育成のための言語活動の充実	論理的思考力、課題解決力養成のための言語活動を推進し、授業改善にもつなげる。	・各学年で論理的思考力を伸ばす論文指導を推進する。 ・各教科で言語活動の充実を図り、授業改善につなげる。	3.1	論理的思考力を高める意識は浸透しているが、さらに効果を高めるにはより計画的・組織的に実践することが必要である。
学 力 向 上	基礎学力の充実	学習時間の確保	平日2時間以上の家庭学習時間を確保させる。	・帰宅時間・睡眠時間等、生活時間の見直しをさせる。 ・家庭学習時間調査の結果を踏まえ主体的に学習に取り組めるよう指導を強化する。	2.8	平均値で見ると概ね達成できているが個別にみると学習時間が不十分な生徒が一定数存在する。主体的な学習に向かうという段階には至っていない。
	わかる授業 ・考える授業の創造	教師の指導力の向上	生徒の学習意欲を高める指導を実践する。	・教科会や公開授業を充実し、生徒が主体的に考える授業展開の工夫、教材の研究に努め、生徒にわかる授業、実力をつける授業の実践を行う。 ・授業評価アンケートを実施し、生徒の実態・要望などを把握し活用する体制を作る。	3.1	教科会は教材研究や問題検討など活発に実施された。公開授業（6月・11月）は参加増に繋がるようなシステムが必要である。授業評価アンケートは学年が上がるにつれ高評価となる傾向があるが、授業改善により活用しやすい工夫が必要である。
キ ャ リ ア 教 育 進 路 指 導	生徒の進路目標の実現	生徒の進路意識高揚に向けた取組の実践	講演会、出張講義などの充実とともに丁寧な個人指導を行う。	・継続的に刺激を与え、将来のキャリアを主体的に考え、自らの可能性にチャレンジする生徒を育む。 ・面接指導を充実し個を理解し、信頼関係の構築と適切な進路指導に繋げる。	3.3	個人指導には担任を中心に多くの時間をかけているが、そのための時間確保が課題である。各取組は同窓会・同心会による支援をいただきながら、必要に応じ改善を加えより効果が高まるよう努めた。
		教師の教科指導力の向上	難関大入試に対応しうる教科指導力をつけ、魅力的な授業・課外を実践する。	・教科会と連携し、教科指導力向上と継承に努める。 ・校内模試の更なる充実を図り、結果を活用する。	3.1	難関大入試対策として外部研修会への参加者も多い。教科会等で還元されているが、教育活動の中での継続的な取組をさらに推進したい。
		教師の進路指導力の向上	3年間を見通した進路指導の実践力をつける。	・校内での進路に関する職員研修や学力検討会、進路検討会を実施する。	3.3	進路指導部・各学年が企画し検討会が実施されたが、位置づけを明確にしより多くの参加を促したい。

生徒指導	済々鬢生としての矜持を持たせる指導	徳育の推進	「他者を思いやる心」の育成を図り社会的倫理観を醸成する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒会行事等において協力し支え合う姿勢を養う。</li> <li>・教育相談部と連携し、いじめを未然に防ぐ取組を行う。</li> </ul>	3.1	機会を捉えモラルの向上を呼び掛け「心の教育」を大切にしているが、いじめ・思いやりを欠く言動は皆無ではない。
		基本的生活習慣と自己規律の確立	時間の厳守や端正な服装の徹底など基本的生活習慣を確立させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校全体で各学期登校指導を実施する。</li> <li>・共通理解のもとに整容検査を行う。</li> </ul>	3.0	各学期の登校指導は実施できた。服装・頭髪等は概ね良好である。あいさつ励行が習慣化されるとよい。
	安全教育の徹底	交通ルールの遵守と安全意識の高揚	社会のルールや規則等を遵守する指導を行うとともに防犯意識を高める取組を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通講話・実技講習会を実施する。</li> <li>・二重ロックの励行を生徒交通委員会でを行う。</li> </ul>	3.1	登校指導、三校合同指導、交通講話等を実施した。幸い大きな事故はなかったものの、交通マナーに関しての苦情が度々あった。
人権教育の推進	豊かな人権感覚を身に付けた生徒の育成	知識的側面からの取組	人権教育における学習指導の工夫改善を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学期毎に学年研修を実施し人権意識の向上に努める</li> <li>・対外的な研修会への生徒や職員の参加を促す。</li> </ul>	2.9	人権教育の職員研修では外部講師を招聘し「部落差別解消推進法」に係る研修を行った。
		価値的・態度的側面からの取組	生徒一人一人の心の内面に働きかけるような指導を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・面談を充実させ生徒が悩みを相談しやすい環境を作る。</li> <li>・生徒理解のための職員研修を定期的実施する。</li> <li>・人権教育推進委員会を適宜実施する。</li> </ul>	3.1	生徒理解のための職員研修を2回実施した。生徒のみならず保護者もスクールカウンセラーとの面談がしやすいよう配慮した。
	命を大切にすることを育む指導	教材の精選と職員の共通理解	関連する教科・領域等の学習を組み合わせる単元を構成し、多様な指導を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全学年とも計画的に指導を行う。</li> <li>・感想の集約などから指導の振り返りを行い、次の指導につなげる。</li> </ul>	3.0	各教科の様々な場面で実践した。また、必要に応じ学年集会等の場面で自他の命を守ることの大切さを訴えた。
いじめの防止等	いじめの未然防止	積極的な啓発活動の実施	いじめをしない・させない・許さない態度を堅持させる指導を徹底する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エンカウンターを実施しストレス対処教育を推進する。</li> <li>・生徒会を中心にした啓発活動を行う。</li> <li>・いじめ防止対策委員会を各学期ごとに行い、生徒の状況の把握と対応に努める。</li> </ul>	3.0	1年生は入学直後の宿泊研修時にストレス対処法について研修を行った。また、SNS利用に係る講演会を全校生徒を対象に実施し、生徒指導部からも繰り返し注意喚起を行った。いじめ防止対策委員会を計画的に開催しスクールカウンセラーからの助言を受けた。

	いじめへの迅速な対応	いじめの早期解決と再発防止	いじめまたはいじめを疑われる事態が発生した場合、被害・加害双方の生徒に速やかに対応、指導を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめ人権アンケートを実施し、実態の把握と早期発見に努める。</li> <li>・いじめ防止対策委員会を開催し問題解決に尽力する。</li> <li>・情報を共有し、事後も指導を継続する。</li> </ul>	3.3	アンケート実施後は心配される生徒に対し各学年を中心に速やかに対処することができた。いじめの未然防止及び発覚後の適切な対応については、今後も定期的に研修を実施する必要がある。
健康教育	健康で安全な生活を送るための実践力の育成	生徒の心身の健康管理と傷病予防	生徒が自身の健康状態を把握し、健康で安全な生活を送れるよう指導を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒保健委員会の校外研修参加及び「保健だより」の発行により生徒による啓発を実施する。</li> </ul>	3.3	保健委員会が、発行物や文化祭ステージ発表で健康管理及び傷病予防について啓発を行った。
			熊本地震後の生徒の心身の健康管理を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心と体の健康調査や保健室来室状況から実態把握に努め、職員間で情報を共有し対応する。</li> </ul>	3.2	健康調査や保健室来室状況から生徒の実態を把握し、課題を抱えた生徒に関し職員間で情報を共有することができた。
	教育環境の整備	清掃指導の徹底と環境保全の意識や奉仕の精神の育成	毎日の清掃を生徒、職員全員で実施し、校内の環境整備を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学校環境衛生検査及び毎月の安全点検を実施する。</li> <li>・美化委員による校内環境の整備を行う。</li> </ul>	2.9	生徒は概ね熱心に取り組んでいるが、校内の様子を見ると清掃指導が徹底されているとは言えない。また、エアコン・電灯の消し忘れも多く生徒・職員の環境保全への意識を高める工夫が求められる。
図書館教育	読書習慣の形成	読書指導の推進	情報提供、時間の設定により読書意欲を高め、図書館利用を促し読書習慣を身に付けさせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「図書館便り」「麒麟児」「碧落」の発行、生徒図書委員会の広報活動を活発に行う。</li> <li>・年に2回、「朝の読書」週間を実施する。</li> </ul>	3.3	生徒図書委員の活発な広報活動や探究論文の作成もあり、図書館の利用が活発である。「朝の読書」は今後も継続して実施したい。
	学習活動支援の充実	蔵書や設備の充実	資料の充実と環境整備をすすめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・館内のレイアウトの工夫。</li> <li>・各教科との連携を図り、必要な資料を収集する。</li> </ul>	3.3	各教科に授業題材等の情報提供を求め、授業と連動した館内展示を行うなどの工夫をする。

保護者との連携	同心会（PTA）と学校の積極的な連携・協力	連携を深め円滑な校務運営を行うための情報提供	保護者への情報提供に努め、本校教育への理解と協力を得る。	・学校HP・同心会HPと会報（同心）の充実と一斉メールの活用をする。	3.2	HP・会報・一斉メールの活用は定着してきた。同心会からの依頼により、情報発信する機会も増えた。
		PTA活動の活性化	同心会総会や学校行事等への参加者を増やし、総会（報告会を合わせて）の出席率を80%以上とする。	・総会や行事の案内など迅速に連絡を行う。 ・総会の効率的な進行や運営を企画する。	3.2	総会出席率は目標を達成できた。その他の各行事の運営も滞りなくでき、どの行事も盛況であった。
地域連携（コミュニケーションなど）	学校運営協議会委員との連携・協力	連携を深め防災・減災を図るための情報共有	学校運営協議会委員と学校との情報共有に努め理解と協力を得る。	・防災型コミュニケーションの円滑な運用を図る。 ・地域と連携した防災訓練を実施する。	2.9	避難訓練時に学校運営協議会委員に来校していただき、意見交換を行うことができた。また、防災食の調理実習を参観、試食していただいた。さらなる情報共有と協力体制構築を図りたい。

<p>4 学校関係者評価</p> <p>(1) 自己評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全ての評価が向上しており、学校の努力に感心している。</li> <li>・学習面において、職員が指導力向上に向けて日々努力していることがわかった。このことにより勉強の面白さがわかり、結果として生徒の自発的な学習に繋がればと期待する。</li> <li>・学力向上・キャリア教育・交通ルールの遵守等での成果がわかった。生徒も学年が上がるにつれて校風を理解し、意識が深まっている様子がよくわかった。</li> <li>・最終年度のSGH成果発表会を見て、自己肯定感の高まりを感じた。また、世界貢献などの高い目標設定ができつつあるように思えた。</li> <li>・学力の向上に加えグローバルな視点を持つことで高校生活が更に充実するものと思う。</li> <li>・進路指導において、難関大学への意識が高まっているのはよいことだ。単に有名だからなどではなく、選択の過程で、生徒自身がしっかりと考えての結果であればよい。</li> </ul> <p>(2) 次年度への課題・改善への方向性について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・SGHへの取組を継承し、これまでの成果を発展させてほしい。</li> <li>・SGH卒業生の追跡調査及びフィードバックを求めたい。大学進学後に留学を考える生徒もいるはずであり、そこまで含めてSGHの成果である。</li> <li>・職業別講演会等の講師は本校卒業生に限定せず、生徒の希望を優先に考慮し職業分野を考えるべきである。</li> <li>・今の社会は学歴ではなく人間力が求められる時代である。またジェネラリストよりもスペシャリストが求められていると言える。濟々鬢高校の生徒は、その光る素質を十分に持って活躍できる人材であり、それを後押しする職員・学校であってほしいと願う。</li> <li>・学力向上に対しては保護者の期待も大きいので、今後の取組の工夫・改善をお願いしたい。</li> <li>・世界基準の人材を育成するためには「勉強も部活動も頑張るべき」という考え方だけではなく、勉強または部活動のどちらかに打ち込むことも大切にすべきではないか。</li> <li>・自他の個性を理解しつつ自分の考えをしっかりと持つ人材、多様な人々が生き生きと動ける環境を作ることができるリーダーを育成してほしい。</li> </ul>
--

## 5 総合評価

職員による4段階の評価に基づいて示した評価結果の平均は、全ての評価項目において概ね「3」となった。平均すると「3.1」であり、全体的には概ね達成できていると判断できる。各項目の評価を比較すると、昨年同様「基礎学力の充実」の項目が最も低い。この項目は評価の観点として「学習時間の確保」を目指したものであるが、学習時間調査（平均値）では見えない個々の取組の差があり、教師側の求めるレベルまで生徒全員が達しているとは言えないという反省があると思われる。他に3項目において評価が「2.9」となったが、中でも「清掃指導の徹底と環境保全の意識や奉仕の精神の育成」が昨年比で大きく評価を下げた。これは生徒の倫理観・使命感育成に係る項目であり、本校三綱領の根幹となる部分である。あくまでも昨年比であり「2.9」という評価自体は極端に低いわけではないが、一定数の職員が「やや不十分」と評価しており、この危機感を次年度の具体的な取組へと繋ぐ必要がある。

反面「SGH事業の精選・継承」の項目が年々評価を高めてきている。これは、これまでの反省が年々改善され、目に見える形で生徒の成長が実感できるようになってきたことによるものと思われる。また「交通ルールの遵守と安全意識の高揚」について、昨年度は小さな事故が続いたことなどもあり評価が低かったが、今年度は昨年度より事故も減少し、やや評価を上げる結果となった。さらに「言語活動の充実」や「わかる授業・考える授業の創造」といった授業改善に繋がる項目が評価を上げていることは、そういう意識が職員に浸透しつつあることを表しており、大いに好ましいことである。まだまだ十分ではないが、SGHへの取組により本校が蓄えてきた教育力を円滑に継承し、授業改善にもさらに力を入れながら、新しい大学入試等にも対応していく必要があると考える。

## 6 次年度への課題・改善方策

平成30年度をもってSGH事業の指定が終了し、過去5年間の経験や成果を今後継承していくうえで、次年度の取組は極めて重要なものとなる。これまでの活動の柱であった課題研究と英語表現活動を通常の教育課程の範囲内で実施し、さらには長期休業を活用した校外研修及び海外研修も可能な範囲で実施していくこととしている。SGH事業を経験した高校として、質の高いものが求められているという自覚を持って取り組む必要がある。生徒にとっては、この取組が大学入試を始めとする自身の進路実現に資するものとなるよう取り組まねばならない。そのためには、日々の授業において言語活動の充実や「主体的・対話的で深い学び」の実践に努め、学力の向上とともに自ら学ぶ姿勢の定着を図りたい。そして、このような生徒と向き合うための時間を確保するには、我々の働き方を見直す必要があり、個々の意識改革を求めるばかりでなく、組織面・制度面の点検も絶えず行ってまいりたい。